言語活動の充実をはかる日本史授業の実践
－歴史的思考力の育成を目指して－

市立　○○○○　高等学校　○○　○○（日本史）

１．はじめに

本校は 1979（昭和 54）年に千葉市民の期待と要望に応え開校した市立高校である。本校の生徒は全体的に真面目で学習意欲が高い生徒が多く，日常の授業に対する姿勢もとても落ち着いている。また部活動にも熱心に打ち込んでいる生徒が多数である。そうした状況が受験に対する意識にもつながり，比較的早い時期から予備校などに通い始める生徒が多く見られるようになる。進路の動向としてはほぼ百パーセント近くの生徒が上級学校への進学を考えており，卒業生の八割以上が四年制大学へ進学している状況である。また全体的には文系進学者の割合が高く，日本史を含め地歴公民科の科目を受験科目としているものが多い。そのような環境から，生徒の中には日本史に対する興味・関心はあるものの，実際には単なる暗記科目，受験科目としてとらえている者が多く見られる現状である。

２．主題設定の理由

自分のこれまでの授業を振り返ってみても，工夫を凝らす努力はしているがそれでも講義形式の授業が中心であり，生徒が自ら主体的に考え取り組む場面が少なかったように感じている。しかしながら，本来様々な歴史的事象とは，その時の時代背景・地理的要因・因果関係・人物相関その他諸々の要因が積み重なって生じているわけであり，そうした要因を理解することで初めて共感や感銘・驚異・尊敬・畏怖などの様々な感情が生まれ，もっと知りたいという更なる興味・関心，知的好奇心が生まれてくるはずである。また，それらを知ることで過去の出来事や行動がその流れを汲み，もしくは様相を変えて現在につながり，そしてさらに未来へとつながっていくであろうことにも気づくことができる。そのためにも日頃から歴史を一面だけではなく多面的・多角的視野を持って考察し判断できるような歴史的思考力を身につけることが必要となる。今回の新学習指導要領の日本史Ｂの目標にも「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連づけて総合的に考察させ，我が国の伝統と文化の特色についての認識を深めさせることによって，歴史的思考力を養い，国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。」とある。さらに新学習指導要領解説にも「諸事象の本質をその歴史的な形成・展開の過程の実証的な考察によってとらえる歴史的な見方や考え方を身につけ，歴史的な思考力の育成を図る（中略）ことが，この科目の最終的なねらいであることを示している。」と記されている。今までの授業の中でもそのような見方・考え方を育てる動機付けとして，様々な視聴覚教材や実物などの資料を用いて意識の向上に努めてきた。特に実物やレプリカなど実際に手にとって見ることができる教材への関心は強く，過去のアンケートでも印象深い授業として記憶に残っている生徒が多い。ただ本来はこうした手法をひとつのきっかけとして，そこから生徒自らが主体的に学習に取り組む，興味・関心を持って授業に臨むという姿勢が大事となる。しかしながら実際は，多くの者が一つの歴史的事象は単なる語句であり，その正解の語句だけを記憶する事が重要と考える者が多い現状である。結果的に，一問一答式の質問には何とか答えられるが，背景や因果関係などの質問には答えに窮する者が多く，歴史を表面上でしかとらえていないことがうかがえる。また，それらの質問に対しても歴史用語のみの回答であったり，あまり深く考えようとせずに「わかりません」で済ませようとするなど，表現力に乏しい生徒も多く見受けられる。今回の新学習

指導要領第１章総則の一般方針には「課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力」や「主体的に学習に取り組む態度」の育成とともに，「生徒の言語活動」の充実が示されている。さらに，第５款教育課程の編制・実施に当たって配慮すべき事項には，「（１）各教科・科目等の指導に当たっては，生徒の思考力，判断力，表現力などをはぐくむ観点から基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに，言語に対する関心や理解を深め，言語に関する能力の育成をはかる上で必要な言語環境を整え，生徒の言語活動を充実すること」と記されている。

このようなことから，現在の本校の現状及び新学習指導要領を踏まえた上で，従来までの講義形式の授業に加え，各自が歴史的事象を多面的・多角的に思考・考察・判断し，かつ，それを表現していくような様々な言語活動の環境を授業に取り込んでいくことで，歴史に対する考え方を再認識させるとともに，歴史的思考力の育成を目指していきたいと考え主題を設定した。

３．研究方法

（１）事前アンケート集計結果（平成２３年９月実施　３年３クラス１１８名回答）

以下に記載した事前のアンケート結果を見ても，質問１の「日本史という教科について」という設問に対しては約７割の生徒が「好き」と答えているのに対し，質問２の「日本史という教科は得意か」という設問にはほぼ同じ約７割の生徒が「苦手」ととらえている。その理由として考えられるのが質問３の「日本史は暗記科目だと思うか」に対し，８割以上が「そう思う」と回答している現状である。興味はある・好印象は持っているが，現実の認識としては日本史は難しいと感じている生徒が多いということがわかる。また，興味がある分野としては人物史・文化史・戦争史がそれぞれ約３割，興味・関心がある内容としては衣食住に関するものが全体の約３割という結果となった。さらに好きな勉強方法としてはやはり講義形式が最も多かったが，今までの印象深い学習方法も含めてみるとやはり個人やグループでの調べ学習等の比率は高いものとなっていた。生徒を主体的に学習活動に取り組ませる要素としては非常に有効なものと考えることができる。

質問１　日本史という教科についてどう思いますか。

好き（含；どちらかといえば好き）81（**69%**）　嫌い（含；どちらかといえば嫌い）37（**31%**）

質問２　日本史という教科は得意ですか。

得意（含；どちらかといえば得意）39（**33%**）　苦手（含；どちらかといえば苦手）79（**67%**）

質問３　日本史は暗記科目だと思いますか。

思う（含；どちらかといえば思う）101（**86%**）　思わない（含；どちらかといえば思わない）17（**14%**）

質問４　日本史の勉強は大切だと思いますか。

大切（含；どちらかといえば大切）109（**93%**）　大切ではない（含；どちらかといえば大切ではない）9（**7%**）

質問５　日本史の勉強は今後の生活に役立つと思いますか。

役立つ（含；どちらかといえば役立つ）88（**75%**）　役立たない（含；どちらかといえば役立たない）30（**25%**）

質問６　日本史で興味のある分野は。

政治史 14％　人物史 31％　経済史 8％　文化史 28％　外交史 10％　郷土史 1％　戦争史 27％

質問７　次の項目の歴史で興味・関心のあるものは。

衣食住　28％　通信交通　3％　防災　3％　芸術　16％　スポーツ　16％　宗教信仰　14％　教育　8％
恋愛結婚　11％　葬儀　3％

質問８　好きな学校の勉強方法はどれですか。

先生が黒板を使いながら教えてくれる授業	35％	個人で何かを考えたり調べたりする授業	7％
友達と話し合いながら進めていく授業	12％	パソコンを使ってする授業	5％
グループで何かを考えたり調べたりする授業	12％	いろいろな人に聞きに行ってする授業や調査	2％
ドリルやプリントを使ってする授業	5％	自分達でテーマや調べ方を決めてする授業	3％
学校外のいろいろな場所に行ってする授業や調査	16％		
考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表する授業	3％		

質問９　今までの社会科の学習方法で，印象に残っているものは何ですか。

何かを作ったりする体験学習	19％	ビデオやスライドを利用した視聴覚学習	30％
何かを調べて発表するグループ学習	31％	テーマを決めて行う討論学習	7％
クイズやゲーム形式の学習	8％	その他	5％

（２）実践計画

本校生徒の現状及びアンケート結果をふまえ，次のような実践を計画した。

ア　年間を通して行う実践

言語活動を通じて表現力の向上を図る取り組みとして，毎時間ごとに前回のまとめを生徒に行わせる。これにより基礎的基本的な知識の定着を目指すとともに，発表という行動をとることで，どのようにまとめどう表現していくのかを各自に考えさせていく。

イ　歴史的思考力を身につけさせる実践

言語活動を通じて歴史的思考力を身につけさせる取り組みとして，個人を単位としたレポート作成発表及びグループを単位とした調査発表というテーマについての学習活動を行う。これらの活動を通して，個人として，そしてグループという集団として歴史的事象を考察する環境を設定することで，多面的・多角的視野を持って考察し判断できる歴史的思考力の育成をはかる。また，それを発表することで表現力のさらなる向上も期待していく。

（３）年間学習指導計画（３年次日本史Ｂ。なお，本校は２・３年次の継続履修）

学期	月	学習内容	実践計画
前期	4 5 6 7 9	第６章　幕藩体制の確立 第７章　幕藩体制の展開 第８章　幕藩体制の動揺 第９章　近代国家の成立	実践１ ↓ 実践２
後期	10 11 12 1	第 10 章　近代日本とアジア 第 11 章　占領下の日本 第 12 章　高度成長の時代 第 13 章　激動する世界と日本	実践３ ↓

４．授業実践

（１）実践１　「日本史授業日誌」を活用した授業導入部分でのスピーチ実施（前時の確認）

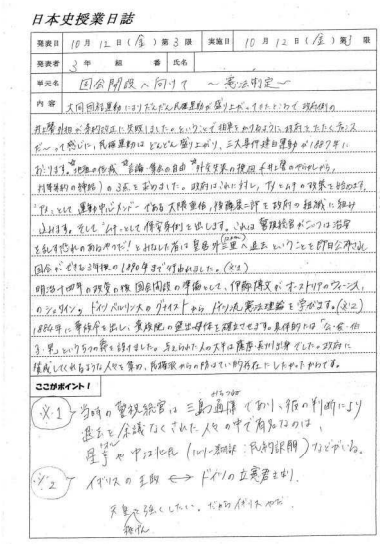
生徒が授業を単なる受け身で受けるだけではなく，かつ，自身の考えで要点をまとめ，発表を行えるようになるためには,そのような言語活動を行う機会を数多く提供することが必要になる。その一つの方法として授業中における生徒への発問があげられるが，これは単発な解答を答えるだけになってしまうことが多い。そこで今回，通常我々教師が授業の冒頭に導入として行っている前時の復習・確認事項を生徒に行わせるという実践を試みた。主な内容としては，発表者は毎回発表するべき「日本史授業日誌」を作成し，毎時間授業冒頭の３～５分を利用して前時の内容

を簡潔に説明すること，発表は生徒の前に出てきた上で行うこと，発表者は出席番号順に行うこと，欠席者がいた場合は順次繰り上げていくということなどを説明し，更にはこれを聞く側の姿勢もあわせて付け加えた。そして発表後はその日誌を次回発表者に手渡すことで役目を終了することとしている。このような機会を与えることで，前時の内容を必要な要点をまとめて短時間で説明するための準備が必要となる。授業はこちらが配布するプリントを使用する形で展開しているので，単にプリントをなぞるだけだと内容が伝わりにくくなるため，自分の言葉でまとめる必要が出てくる。また，この発表を聞いている側も通常我々が行う場合とは違い，発表者がどのようなまとめ方をしているのかを興味深く聞くようになり，結果的にはいい復習になっているのではないかと感じている。また，回を重ねるにしたがってまとめ方のうまい者も出てきている。こちら側が日誌を作成させ，また生徒の前で発表させているということも影響してか，各自のまとめ方，発表時の態度，発表者の声など，回を追うごとに全体的に向上しているように見受けられた。事後アンケートの回答を見ても，成果があったことを伺える感想が多くあがっている。今後は更に実践結果をもとにして内容を検討し，充実したものになるよう取り組みたい。

事後アンケート回答（平成２３年度末）
- 前回のまとめとして発表したのは自分自身の復習にもなるし，かなりためになった
- 前回のまとめを行うことで自分も情報が整理できるようになった
- 出来事の流れのようなものを意識して学べるようになってよかった

【生徒の発表の様子①】

【生徒の発表の様子②】



日本史授業日誌

発表日	10月12日（金）第3限	実施日	10月12日（金）第7限
発表者	3年 組 番	氏名	
単元名	国会開設へ向けて ～憲法制定～		

内容：大隈重信は、[illegible]

ここがポイント！

※1 当時の[illegible]

※2 イギリスの王政 ⟷ ドイツの立憲君主制

【授業日誌】

（２）**実践２　「人物日本史」のレポート作成**

歴史的事象を一面的にとらえるのではなく，当時の時代背景や当事者サイドからの視点での調査・発表を行わせることで多面的・多角的に考察し判断できるような能力の育成を目指すことを考え，この「人物日本史」のレポート作成を行わせた。本来は我々教師が説明の際に触れる事項･エピソードの一部を各自でレポートさせることで，生徒自身がより興味・関心を持ち歴史への取り組みに変化が生じることを期待して行った。また，作成後は掲示・発表等を行う前提であるという事にもふれて，創意工夫を行うようにと指示した。

ア　事前説明（１時間）

授業の最初にプリントを配布して，下記内容を簡単に説明し，各自の希望を調査した（第五希望まで）。以下はその説明の際に作成したプリントからの抜粋である。

1.以下の表Ａ・Ｂ（割愛）より自分の興味・関心ある人物を一人ずつ選択する。
2.選択した二人について，Ａ４用紙１枚ずつにまとめて提出する。
3.まとめる内容としては，
　①顔写真（無ければ絵でも）を掲載する。

②人物の生い立ちや功績などを簡潔にまとめる。
③人物相関図や主要エピソードを盛り込む。
④特にその人物に関する主要出来事については，一般的な視点と選択した人物の視点両方で構成する。（歴史的認識をその人物サイドからとらえてみる。）
⑤自分としての人物に対する評価を必ず盛り込む。（編集者的立場から）
⑥「その人物の行った事は後世にどのような影響を与えたか」という視点からの説明を加える事。
4.提出された資料は，後日掲示または印刷・配布していく予定です。（丁寧に，濃く記入すること）
5.その際，授業中に簡単な発表をお願いする予定です。
※単なる事象の羅列にならないよう，各自構成を工夫すること。

選択した人物は明治時代以降の教科書に登場する人物からこちらであらかじめ準備をした。その後，希望調査の抽選を行い生徒へ発表，提出日の確認を行った。

イ　調べ学習

平成２３年度は事前に日時を生徒へ予告した上で，図書館を利用し授業内において調べ学習を１時間実施した。事前準備や図書館の下見をしている者は速やかに行動にとりかかったが，一部の生徒の中には時間を有効に活用しきれていない者も見受けられた。その後，約２週間後となる提出日の再確認を行い，放課後等の時間を活用することを指示した上で授業を閉じた。

平成２４年度はこの作業を夏季休業中の課題とし，各自で時間を設けて完成させるよう指示をした。そして９月提出の確認後，授業を閉じた。

ウ　レポートの提出・発表

レポートの提出状況は良好であったが，内容的には個人差が大きかった。かなり時間をかけて準備を行った作品も提出されたが，明らかに短時間で作成したと思われる作品もあり，更に一部にはレポートの作成項目のすべてをきちんと盛り込めていない者もあった。

レポートの発表には，まず数人で１班を形成し，その班内で各自のレポートを発表させた上で班代表を決定し，次にその代表のレポートを班員全員が分担して全体の場で発表するという形式をとった。各代表者のレポートをまとめて印刷し，生徒に配布した上で発表を行った。時間は各班５～１０分を目安とし，全体で約１時間で実施した。発表自体についてはレポート作成段階の作業時間及び情報収集の差が若干表れていたが，概ね良好であった。また，発表を聞く側にとっても我々教員からではなく，クラスの仲間が，教科書レベルではない，その人物のエピソードや人間性の部分にまでの説明をすることで，印象の度合が深まっていたように感じられた。若干ではあるが単なる歴史の一場面に関わる登場人物としてだけではなく，その人物を立体的・現実的にとらえさせることができたと考える。

エ　評価

（ア）生徒による自己評価

・後日実施したアンケートの中で，各自の自己評価を行わせた。

（イ）指導者による評価

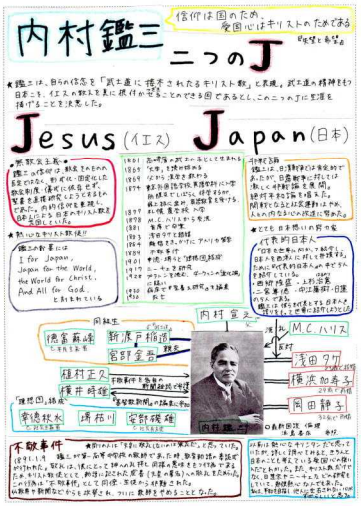
・以下の評価規準に従い評価を行った。また発表についてはその場において講評を行った。

【評価規準】

関心・意欲・態度	設定人物に対し興味・関心を持って積極的に取り組むことができたか。
思考・判断・表現	事前説明の 3.の①～⑥がきちんとまとめられているか。

	レポート作成においての創意工夫が見られたか。 発表を明快に行い，かつその内容がきちんとまとめられていたか。
資料活用の技能	図書館・インターネット等の情報を適切に収集・選択し，有効に活用できたか。 レポートの作成において収集した各種資料を取捨選択して使用することができたか。
知識・理解	設定人物に関する知識や理解を深めることができたか。

オ　生徒のレポート作品



カ　実施後のアンケート分析

以下は年度末において行ったアンケート調査の結果である。

この活動（作成及び発表）について関心を持って取り組めましたか。
十分できた（２８％）　おおむねできた（６５％）　ややできなかった（５％）　できなかった（２％）
レポートは適切にまとめられましたか。
十分できた（１６％）　おおむねできた（６０％）　ややできなかった（２２％）　できなかった（２％）
個別に担当した人物についての理解・興味は深まりましたか。
十分深まった（３９％）　多少深まった（５４％）　あまり深まらなかった（４％）　全く深まらなかった（３％）
個別発表に関して自己評価をしてください。
十分できた（２０％）　おおむねできた（５７％）　ややできなかった（１８％）　できなかった（３％）

アンケートを見ると９割以上の生徒が関心を持って取り組んでもらえたことが分かる。レポート内容にしても構成や視覚的効果など様々なオリジナルの工夫を加えての力作も多かった。また，その成果として個別に担当した人物への理解・興味への深まりに反映した回答が出ている。内容的な深まりには個人差があるが，このような取組により，別の視点・角度から見るということが歴史的事象をより深く理解し，その全体像を認識することができるということに気づいてもらえた。後述の感想にもあるように，それ以後は意識的に視点を変えて考察できる者もあらわれてきている。しかし，レポート作成・個別発表に関して約２割の生徒が「できなかった」と回答している点に対してはこちらの説明不足によりその趣旨が伝わらなかったということをこれからの課題としたい。以下は事後アンケートの感想の一部である。

・その人物の視点に立って出来事を見てみたり，どのような性格かを知ることで出来事の関連性を見つけられたり（出来事の関連性から性格を見出すことも）と，自分の視野を広げることができた。
・人物調べで「その人の視点」でその時代について考えてみると，何となく違った捉え方ができた気がしたので、少し考え方が変わった。

・当事者の気持ちを考えたり，ある事件においての犯人←→英雄と捉え方に違いが生まれることを意識できるようになった。

（３）実践３　グループによる調査，発表学習

ア　事前説明・グループ分け・テーマ決定（１時間）

授業において，数時間をかけて通常とは趣向を変えて事前に実施したアンケートに基づいてグループ学習を行うことを説明した。その趣旨として，アンケート結果からも読み取れるように日本史の授業は大切だと考える者が多い反面，今後についても役立つと考えている者がそこまで高い割合ではないという点，やはり多くの者が暗記科目だと考えている点を紹介した。本来は歴史とは一面的ではなく様々な視点からの見方をする必要があることを強調し，そうした視点からの一例として実践２の「人物日本史」のレポート作成があったことを再度説明した。前回はこうした目的を個人単位で行ったことを踏まえ，今回はそれをグループ単位で行うことで，更に複数の視点から一つのテーマを多面的・多角的に考察し判断できるような能力の育成を目指し，この実践を行わせた。

グループ分けは各クラス男女ごとに７班とし，その後くじ引きで男女合同班を作成した。これは班が同性でまとまることで見方がやや同一方向になるのを避けるためと説明した。

テーマはアンケート結果の割合が高かった項目を参考に設定し「現代と近代を結ぶ歴史」として「衣食住・防災」「文化・宗教・信仰・スポーツ」からの選択（４班）とし，「世界の視点から見る歴史」として「日清戦争」「日露戦争」「韓国併合」からの選択（３班）とした。「現代と近代を結ぶ歴史」については，新学習指導要領日本史Ｂの「３　内容の取扱い（１）のエ」及び高等学校学習指導要領解説日本史Ｂの「３　指導計画の作成と指導上の配慮事項」（４）伝統や文化の学習について（内容の取り扱いの（１）のエ）を参考に設定した。また「世界の視点から見る歴史」については，日本からではなく相手国及び世界からの視点で調べさせることで多面的・多角的に考察し判断できるような能力の育成を目指した。

事前説明後，各班ごとに調査テーマの検討に入らせ，重複テーマについては抽選し，テーマ決定班から順次作業を開始させた。

【各班が設定したテーマ一覧】

	３年Ａ組	３年Ｂ組	３年Ｅ組
1	結婚式の歴史	防災の歴史	絵画の歴史
2	外国から伝わった食文化	オリンピックの歴史	近代文学の歴史
3	服装史	絵画の歴史	制服の歴史
4	教育の歴史	食文化の歴史	近代教育史
5	日清戦争	日清戦争	日清戦争
6	日露戦争	日露戦争	日露戦争
7	韓国併合	韓国併合	韓国併合

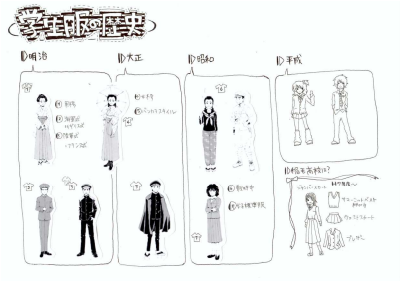
イ　図書館での調べ学習（４時間）

図書館での作業は各班の構想の進展度合により様々であった。発表の輪郭が明確になっている班は個々の役割分担もはっきり分業化され着々と進行したが，逆に，テーマを決めたのはいいが思うように資料が集まらず，途中でテーマ変更を願い出る班もあった。また，今回は模造紙による資料作成とともに個人へ配布する発表用レジュメの作成を課していたが，このレジュ

メを資料とは別にどのような内容・形式でまとめるかに苦労している班も見られた。事前説明で触れていたが，掲示用資料とは違い，いかに簡潔にまとめわかりやすく構成するかにとまどる様子がうかがえたことから，机間巡視を行い助言や資料紹介などを行った。

【生徒の作業風景①】

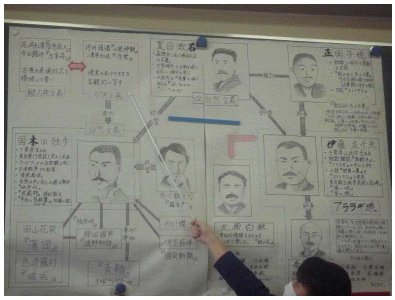
【生徒の作業風景②】



【各班のレジュメ】

ウ　発表

発表は各班１０～１５分を目安とし，全体で２時間を予定した。各クラスとも「現代と近代を結ぶ歴史」を選択した班からの発表としたが，各班がそれぞれ趣向を凝らした発表を行った。一般的な研究発表を行う班もあれば，紙芝居風の形式をとる班，発表の合間に準備してきた衣装に着替えての報告を行う班，また，自分達で演出・台本を考えた上での演劇を交えた形式での発表を行った班などそれぞれの班に自分達の発表をより理解してもらおうとする工夫が見られた。発表時間もほとんどの班が時間を最大限に活用して行い，中には時間を超過してまで報告を続ける班もあり，クラスによっては発表時間を１時間増やさざるを得ないところもあった。しかしそれに関してはただだらだらとした発表だったわけでもなく，聞く側もしっかりと聞いていたことから，あえて途中で口をはさまずに最後に軽くコメントするに留めた。それに対し「世界の視点から見る歴史」をテーマとする発表班は集められた資料・情報量により，こちらの期待した内容まで報告を膨らませられなかった班もあったが，それぞれのテーマを様々な角度からとらえようとした努力は随所に見受けられた。各国ごとへのインタビュー形式をとる班や両国の主張を対比した形での発表を行う等の取組が見られた。さらに，各テーマの中に千葉に関するエピソードを盛り込むことを指示していたが，班によってはそこまで話を広げられなかったところもあり，この点はやや残念であった。



【生徒の発表の様子①】

【生徒の発表の様子②】

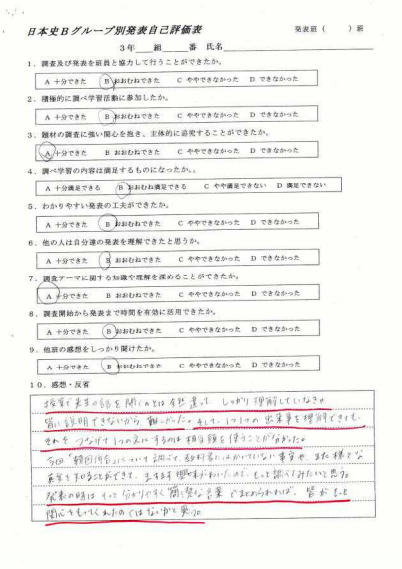
【生徒の発表の様子③】

エ　評価

評価は生徒には以下に示した資料１，２の評価表によって各自の自己評価及び他班への評価を行わせ，併せて以下の観点と評価規準をもとにした教師の評価を行った。

【評価規準】

関心・意欲・態度	班員と協力して調査・発表を行うことができたか。 テーマに対し興味・関心を持って積極的に取り組むことができたか。 他班の発表・意見をきちんと聞く姿勢がとれたか。
思考・判断・表現	得られた多くの情報の中から，理解しやすいものを使用することができたか。 発表資料・レジュメの作成において収集した各種資料を取捨選択して使用することができたか。 発表方法などを創意工夫することができたか。
資料活用の技能	図書館・インターネット等の情報を有効に使用し，発表において表現できたか。
知識・理解	各テーマに関する知識や理解を深めることができたか。


日本史Bグループ別発表自己評価表

発表班（　）班

3年＿組＿番 氏名＿

1．調査及び発表を班員と協力して行うことができたか。
A 十分できた　(B) おおむねできた　C ややできなかった　D できなかった

2．積極的に調べ学習活動に参加したか。
A 十分できた　(B) おおむねできた　C ややできなかった　D できなかった

3．題材の調査に強い関心を抱き，主体的に追究することができたか。
(A) 十分できた　B おおむねできた　C ややできなかった　D できなかった

4．調べ学習の内容は満足するものになったか。
A 十分満足できる　(B) おおむね満足できる　C やや満足できない　D 満足できない

5．わかりやすい発表の工夫ができたか。
A 十分できた　(B) おおむねできた　C ややできなかった　D できなかった

6．他の人は自分達の発表を理解できたと思うか。
A 十分できた　(B) おおむねできた　C ややできなかった　D できなかった

7．調査テーマに関する知識や理解を深めることができたか。
(A) 十分できた　B おおむねできた　C ややできなかった　D できなかった

8．調査開始から発表まで時間を有効に活用できたか。
A 十分できた　(B) おおむねできた　C ややできなかった　D できなかった

9．他班の感想をしっかり聞けたか。
A 十分できた　(B) おおむねできた　C ややできなかった　D できなかった

10．感想・反省
授業で本当の話を聞いたりとか自分達で調べてしっかり理解していなかったから説明できないから難しかった。また、1つ1つの出来事を理解できたしそれをつなげて1つの流れで考えれば理解を深めることが分かった。今回「韓国併合」について調べて、あまりあまりしていない事実や、また様々な事実を知ることができて、とても興味がわいたので、もっと調べてみたいと思う。発表の時は、とてもなりきれず、間違いを重ねてまねわれば、皆がもっと聞いてもらえるためではないかと思った。

【資料１　自己評価表】

日本史Bグループ発表　グループ別評価表（個人）

3年＿組＿番 氏名＿

	5班				6班				7班			
発表テーマ	日清戦争				日露戦争				韓国併合			
発表の内容	A	(B)	C	D	A	(B)	C	D	A	(B)	C	D
発表の分量・時間	A	(B)	C	D	A	(B)	C	D	A	(B)	C	D
発表時の工夫	(A)	B	C	D	A	(B)	C	D	(A)	B	C	D
発表者の態度	A	(B)	C	D	A	(B)	C	D	(A)	B	C	D
資料・レジュメの内容	A	(B)	C	D	(A)	B	C	D	(A)	B	C	D
「千葉」について	A	B	(C)	D	A	B	(C)	D	A	(B)	C	D
総合評価	A	(B)	C	D	A	(B)	C	D	(A)	B	C	D
発表を聞いて疑問に思ったこと	メモ				(例)5 朝鮮の日露戦争 → 戦争継続困難に				蓄積 高額			
よかったと思う点	人物の表し方が面白かった"(笑)" 地図を利用していたので良かった				聞きやすかった！資料も文字が大きく、シンプルで見やすい ロシア側からの視点というのは新鮮。				資料がたくさんあって良かった！ 単なる検索わけなくて面白い 現代の日韓問題にも触れている！			
感想・意見	練習して、ロールプレイングで会話がリンクしていたらもっと面白かったにゃう(ねぇ！と思います				好き→戦争組　嫌→発表組 日露戦争、2対1もやりたかった！				韓国併合難しい！ でも朝鮮のことについてよく分かった。(一族のルとか…) 2国の利害立場からの意見が良く分かった!!			

評価基準　A 十分満足（理解・評価）できる　B おおむね満足（理解・評価）できる　C やや満足（理解・評価）できない　D 満足（理解・評価）できない

【資料２　グループ別評価表（他班の評価）】

オ　分析と検証

1．調査及び発表を班員と協力して行うことができたか。

A 十分できた(35%)　B おおむねできた(53%)　C ややできなかった(12%)　D できなかった

2．積極的に調べ学習活動に参加したか。

A 十分できた(41%)　B おおむねできた(46%)　C ややできなかった(13%)　D できなかった

3．題材の調査に強い関心を抱き，主体的に追究することができたか。

A 十分できた(34%)　B おおむねできた(48%)　C ややできなかった(17%)　D できなかった(1%)

4．調べ学習の内容は満足するものになったか。

A 十分満足できる(29%)　B おおむね満足できる(59%)　C やや満足できない(12%)　D 満足できない

5．わかりやすい発表の工夫ができたか。

A 十分できた(18%)　B おおむねできた(53%)　C ややできなかった(28%)　D できなかった(1%)

6．他の人は自分達の発表を理解できたと思うか。

A 十分できた(12%)　B おおむねできた(64%)　C ややできなかった(23%)　D できなかった(1%)

7．調査テーマに関する知識や理解を深めることができたか。

A 十分できた(50%)　B おおむねできた(47%)　C ややできなかった(2%)　D できなかった(1%)

8．調査開始から発表まで時間を有効に活用できたか。

A 十分できた(17%)　B おおむねできた(49%)　C ややできなかった(33%)　D できなかった(1%)

9．他班の感想をしっかり聞けたか。

A 十分できた(55%)　B おおむねできた(37%)　C ややできなかった(8%)　D できなかった

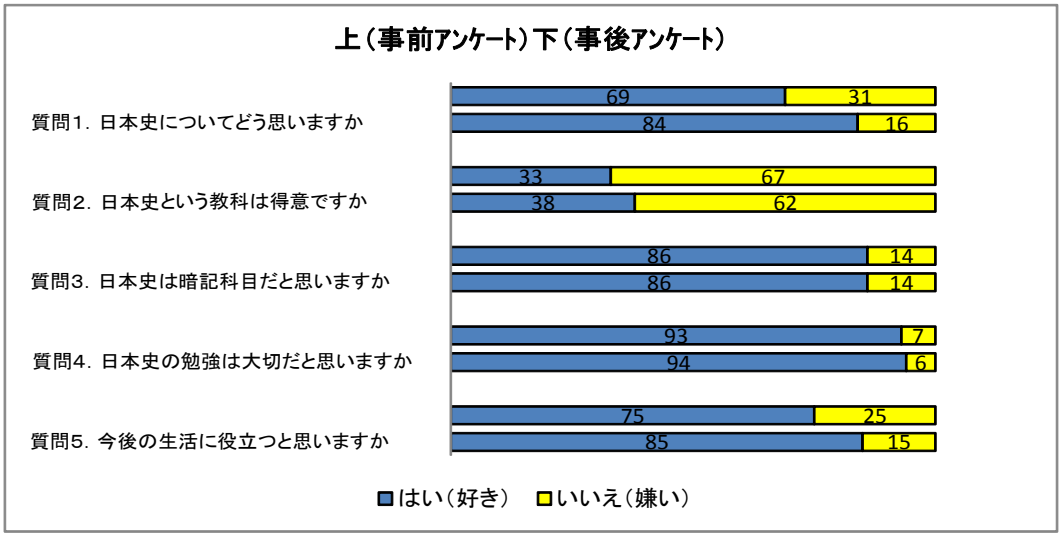
アンケート結果から，全体的に８割以上の生徒が積極的に，関心・意欲を持ってこの調査発表に取り組み，そして理解することができたことがわかる。多くの生徒は最初は面倒だという気持ちが強かったようであるが，いざ班別に分かれて作業が開始されると，それぞれの班の中で発表資料やレジュメの構成や発表方法などの議論が行われ，時には放課後や早朝に集まってその検討や作業を行う班も見られた。発表に備え各班でリハーサルを行うなど，自分達の知り得た知識をいかに発信することが他者の理解につながるかを意識した工夫が見られたことなどは，今回の取組である言語活動の充実による一つの成果ととらえることができる。質問５「発表の工夫」と質問８「時間の有効活用」について「できなかった」と約３割が回答しているが，この中には「調査に時間を多く費やしてしまった分発表まで時間が足らなくなり，予想以上に説明できなかった」「きちんと伝えられなくて悔しかった」等の感想が見られる。つまり単なるマイナスの回答というよりはうまくできずに残念だという主体的取組に対する反省が含まれたデータとしてとらえることができ，むしろ逆の意味でこの実践の成果といえる。以下は生徒の感想の一部である。

【グループ発表後の生徒の感想】

・日露戦争について詳しく調べた結果，各国の日露戦争観や千葉県がどのように関わったかなど，日露戦争の理解を深めることができた。ただ，テーマが難しくて自分が理解するので精一杯で，発表時にわかりやすく説明することができなかった。もっとレジュメに工夫が必要だったと思う。
・今まで様々な地震や災害があったのは知っているが，その後どのような対策がとられてきたかはあまり知らなかったので，この機会に知ることができてよかった。日本は地震が多い国であるのでその分様々な対策や防災を試行錯誤してきたから今の防災があるのだなと思った。今回の東日本大震災で大きな被害を受けたが，しっかり対策をとっていき，次このような震災がきた時に被害を減らせるようにしていくことが大事だと思った。
・普段の授業とは全く別の雰囲気の中で学習することができました。私は日本史受験ではないのですが，今回自分達が調べた範囲に関して，多く関心を持てたし，他の班の発表も聞いて，すごく内容の濃い学習ができたと思います。
・調べる前は日清戦争について何も知らなかったのですが，各国の視点から調べてみるととてもわかりやすく理解することができました。これからも様々な視点から物事を見ていきたいです。
・自分で調べることで，もとから知っていた知識は深くなり，知らなかったこともたくさん知ることができた。見方によって全然違うものになることも知ることができた。他の班の発表を聞くことでいろいろなことも知ることができたのでよかった。
・授業で先生の話を聞くのとは全然違って，しっかり理解していなきゃみんなに説明できないから難しかった。そして一つ一つの出来事を理解できてもそれをつなげて一つの文にするのは相当頭を使うことがわかった。発表の時はもっとわかりやすく簡潔な言葉でまとめられれば，みんながもっと関心を持ってくれたのではないかと思う。（いろいろな視点から見ないとだめだなとかがわかってよかった。）

５．まとめ（実践後のアンケートによる検証）

（１）事後アンケート集計結果（平成２４年１月実施　３年３クラス９８名回答）



質問６　これらの活動を通じて歴史教科に対する意識の変化はありましたか。

以前より興味関心が持てるようになった（３９％）　　すこしは興味関心が高まった（４６％）

あまり変わらない（１４％）

質問７　これらの活動は歴史を一面からだけではなく，様々な角度から見ることを主眼においた取り組みでしたが，行ってみてどう感じましたか。

十分できた（１７％）　　おおむねできた（６７％）　　ややできなかった（１６％）

【生徒の感想】（波線部は筆者による）

・日本側から見ただけではなく，他の色んな国から見た考え方を知って，その上で自分はどう見るかを考えることができるよい機会だった。

・自分達で調べて発表することによって理解が深まったし，現在にもつながっている話題だし，日本人として，当事者として知っておかなければならないことだと思った。過去の事柄として覚えるだけじゃなくて今につなげて考えていって，それに対しての自分の意見を持つことが大切だと思った。

・双方の理由とかを知ることで，その人物や国に対するイメージが変わると思ったし，自分で調べたことですごく記憶に残ったし，そこから興味を持った本とか映画とかを見つけられてよかった。

・縦の流れだけでなく，一部分に目をとめてみることで出来事の関連を横から見ることができた。

・発表を終えてから関心が更に深まった。人に発表するためには自分がきちんと理解していなければいけないので，ちゃんと伝えられるか不安だったし，緊張もしたけれど楽しかったし，それなりにできたと思った。人の発表を聞くのも勉強になった。

・最初は少し面倒に感じたが，結果的に歴史を様々な方向から見ることができるようになったのでよかった。

・教科書や塾のテキストなどの歴史も大事だけど，自分でいろいろな情報を引っ張ってきて理解を深めることの重要さなどがわかり，自分自身の理解も深まったからです。

・日本史は今まで嫌いで苦手な教科だったけど，好きで苦手な教科に変われてよかったです。

アンケート結果や感想を見ると，今回の実践等を通じて日本史という教科に対しての興味・関心は高まったことがうかがえる。多くの生徒が関心を持って意欲的に取り組んでくれたことは大きな成果といえる。また，過去と現在をつなぐテーマの発表を行ったことの効果か日本史の勉強が今後の生活に役立つと感じた生徒も微増ではあるが割合が高まった。「過去の事柄として覚えるだけじゃなくて今につなげて考えていって，それに対しての自分の意見を持つことが大切だと思った。」との感想をあげる生徒もあり，一応の効果があったことがうかがえる。また，暗記科目かとの質問に関しては残念なことに前回とほぼ同様のデータとなり，生徒の意識を変えさせる難しさを感じたが，その中でも「やはり暗記がメインにはなってしまうが，それぞれの出来事に

は一つ一つ理由があるから，そういうものを知っていくことが重要だと思う」との感想もあり，多少の意識付けは行えたと考えられる。生徒の感想の中に，「もっとじっくり時間をかけてやりたかった」「できれば高１か高２でやりたかった」など，より積極的な回答が多かった。確かに受験を控えた高校３年の秋から冬にかけての取組であったため，じっくり取り組みたい気持ちはあるものの，全面的に集中しきれなかった部分は否めない。今までより主体的に授業に取り組もうとする姿勢が見られてきた点をふまえ、今後は実施時期や内容なども含め更に検討を重ねたい。

今回の授業実践では，「個人による授業のまとめ発表」によりまず通常授業での発表環境を整え，「個人による人物日本史の作成発表」により当事者サイドからの視点での調査・発表を行わせ，「グループによる調査発表」により更に複数の視点から一つのテーマを考察することを行わせた。こうした様々な言語活動を取り入れた授業実践を通じて歴史を多面的・多角的視野を持って考察し判断できるような歴史的思考力の育成を目指した試みであったが，事後アンケート質問７にあるように，「十分できた」とまで言い切れる者はやや低い割合であり，それ故残念ながら今回の取り組みがこうした歴史的思考力を飛躍的に向上させたと断言できるだけの結果は得られなかった。しかし，「おおむねできた」者まで含めると８割以上の者が自分なりの観点でその事象に関わり，普段とは違った視点からの考察が行えたことになることから，こうした言語活動を取り入れた授業が歴史的思考力の育成の一助となったという事は間違いない。また，今回の実践で特に生徒の変化を感じる事ができたのが，今年度の１５人の選択クラス（日本史Ｂ４単位）での取り組みであった。少人数であるが故に当然授業冒頭の発表回数は４０人展開のクラスに比べ回転が速くなるが，それ故，回を重ねるにつれ各個人の発表の質がより向上していく事を日々の授業の中で感じられた。歴史的背景をしっかり盛り込み，表面的ではなくその内容にふくらみを持たせ，さらにはいかに表現することがより理解を得られるかを考えて発表に臨む姿勢が取組に対する効果の現れといえる。つまり，様々な形で言語活動を充実させていくことが，生徒の思考力・発想力・判断力の育成につながり，それが結果的に歴史的思考力をもたらしていくという事を実感する事ができた。今回取り組んだ日本史の授業での言語活動はまだ考えられるものの一部に過ぎず，今後は我々教師側が，今まで以上にその内容を検討し授業に臨んでいく事が必要とされる。これからの課題として今後も取り組みたい。

６．おわりに

今回の研究を行うに当たり，最初は戸惑いの方が大きかったが，改めて振り返ってみると工夫はしつつも講義形式が中心となってしまいがちな従来までの授業のスタイルをもう一度再確認するいい機会に恵まれたと感謝している。思い起こしてみれば，いかにして生徒に日本史への興味を持たせることができるか，どうすることが歴史嫌いに日本史を好きにさせる事ができるかが初任の勤務校での原点であった。「好きこそものの上手なれ」まずはそこからであった。今回の研究は改めて原点に戻ったつもりで取り組ませていただいた。結果的には全てに満足のできる結果とは言い切れなかったが，そんな中でも生徒の感想の中に「日本史は今まで嫌いで苦手な教科だったけど，好きで苦手な教科に変われてよかったです。」とのコメントがあった。今後こうした生徒を更に増やしていけるよう，今まで以上に創意工夫して授業に取り組みたい。

最後に，２年間にわたり，御指導・御助言をいただいた千葉県教育庁教育振興部指導課の指導主事ならびに教科指導員の先生方に，この場をお借りして心から感謝を申し上げます。